門間家の番犬事情

ゆさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
門間家の番犬事情

【Ｎコード】
Ｎ０７６８Ｚ

【作者名】
ゆさ

【あらすじ】
魔法は電脳空間に移され、誰もが携帯電話やノートパソコンを持つ時代。
ジャポンに住む門間家は、ハイテク機器に囲まれた生活よりもスローライフを好む貧乏一家だ。
有名な魔法使いを先祖に持ち、電子辞書よりも辞書、携帯電話よりも魔道書と昔懐かしい手法を好む母は、その教えを忠実に守っている。
ある日、僕は、押入れのダンボールの中から古びた一冊の本を見つ

ける。

それが、はじまりだった。

気が向くままの不定期更新です。一話分がとても短いです。

＊警告タグは、意思表示です。

序

時は並成、世界魔法大戦より百数十年後。
大戦に大敗を喫し、勝利国の統治下に置かれたジャポンは統治総司令部の下、国一丸となって復興に励んだ。
数年後、勝利国の統治総司令部も引き上げ、ジャポンは自立の道を歩みだし、高度成長期に入った。
あらゆる魔法が揃うといっても過言ではないジャポンは、国の方針のもと、新たなる魔法の研究に乗り出す。
しかし、新たなる魔法というものの定義が定まらず、研究者達が研究を止めようとしていた時、ある一組の研究チームが提唱した理論が話題になる。

『魔法を、電脳空間に定着させることに成功』

研究の場は電脳空間やネットワークに移っていった。
そして、現代ジャポンの魔法は、携帯電話やノートパソコンという機器とそこに構築された魔法空間での活動が主流になっている。

1

僕のお家は、母子家庭です。
お母さんの口ぐせは、一ヶ月五千円生活ばんざい、です。
お父さんは、いません。
お母さんに、お父さんはどこにいるのって聞いても、ランプの中で寝ているとか、ごまごま黒ごま白ごま金ごまアザラシごま、という変な呪文を砂漠の中央で叫ばないと会うことが出来ないと言います。
お父さん、正直僕は面倒なので会いたくありません。

学校は、楽しいときもあるけれど、勉強についていけないです。
とくに魔法の授業は、頑張っても頑張っても、電話やパソコンの電源の入れ方が分りません。
先生もあきらめていて、僕だけいつも点数がわるいです。
お母さんは、電脳空間だけが魔法じゃないと言って励ましてくれるけど、魔法以前の問題だとおもうのです。

学校帰りは、学校の近くのちょっとした茂みで自然薯ほりです。
途中でポッキリ折れないように、優しく土を掘ります。
あと、野蒜とかも摘んで帰ります。
たまに、近所のおばさんが食べ物をお裾分けしてくれます。そういう時は、テーブルの上が豪華になって、すごく美味しいです。

2

「小太郎、あなたの部屋の押入れにある物を、いる物といらない物に分別しておいてくれないかしら。今度、海辺の野原公園でフリーマーケットがあるんですって。参加費無料なのよ、売れるかもしれないから出ることにしたわ」

「わかったー」

「では、自然薯は預かるわ。今日は頑張ったのね、偉いわよ。さあ、手を洗っていらっしゃい」

「うん」

今日の収穫をお母さんに渡して、外にある水場に駆けていく。手を丁寧に濯いで土を落とし、穴掘り用に着用していたエプロンも束子で汚れを落とした。絞って水気を飛ばし、ハンガーにかけて吊るした。

「エプロン、よし。今日は長いのが採れたから、明日は野草を摘もう」

両手ではさみながら叩いて皺を伸ばした。それが終わると、自分の部屋に戻る。

「フリーマーケットだって。僕のおもちゃも買ってくれる人いるのかな」

押入れから三つのダンボール箱を引っ張り出した。おもちゃは、なるべく奇麗で壊れていない物をだそう。置く時も放り投げずに、ゆっくりと手を下げて床に置いた。

「これくらいかな。こっちは洋服だから、お母さんに聞いてからにしよう」

中身だけは取り出して、畳の上に広げて置いた。取り残しはないかと、手だけでダンボール箱の中を探っていると、指先にコツンと硬質性の何かが触れる。

「本だ。お母さんの本かな、なんでこんな所にあるんだろう」

重厚な作りの表紙にトルコ石の様な青い石が散りばめられている。その石に魅せられてか、表紙を開いて数頁捲った。印刷された文字に指を這わせてなぞる。

「なんて書いてあるんだろう。あーあ、分らないや。学校もパソコンだけじゃなくて、こういう文字の勉強をさせてくれないかな」

授業に対する不満を言ってもキリがつかない。本を閉じて作業に戻ろうとしたとき、なぞった文字が淡い光を放っているのを見つけた。

「わぁ、どうしよう。と、止められないかな」

淡い色から段々と強い色を帯びるようになり、やがて強烈な閃光が部屋を包んだ。

「なっ。なに、なにっ」

咄嗟に目を片手で覆い隠す。眩し過ぎて目蓋も開けられなかった。

3

「お母さん、お母さん、大変だよ、お母さん」
本を抱きしめて、騒がしく階段を下りた。一階の部屋を一巡りしても姿を見つけることが出来なくて、お風呂場も覗く。
「あら、どうしたの」
お母さんは、泡立てたスポンジを握って浴槽を磨いていた。
「大変なんだよ」
「小太郎、落ち着きなさい。それから、後ろにいる犬は、もといた場所に返してきなさい。家は動物を　飼う余裕が無いと言っているでしょう。使い魔でもない限り、駄目なものは駄目なのよ」
「違うんだよ、お母さん。これ、これがっ」
本を突き出して、表紙を見せる。
「まあ、この本どこにあったの？　探していたのよ。小太郎、見つけてくれてありがとう」
手についた泡を水で洗い流し、エプロンで水気を拭くと本を受取った。
「僕の押入れ、じゃなくてっ」
「そう、小太郎の押入れね、……じゃないの？」
「ちがくて、押入れなんだけど、そうじゃないの！」
僕は一生懸命伝えたいんだけど、言葉がなかなか見つからない。
「どっちなの」
「押入れのダンボール。洋服が入っててて、それの一番下にあったの」
「小太郎の洋服？　記憶に無いわねぇ」
「それで、その本を触っていたら、ピカーって光りだして、あの犬が出て来たの」
文字をなぞったページを見せたくて、お母さんから本を取ろうとしたんだけど、駄目といって手が届かないようにしてしまう。高い高いって、赤ちゃんにしているみたいに。

「本から。ほんとうに？」
僕はうんうんと何度も頷いた。だって本から出てきたのは本当なんだもの。まぶしくて目を開けていられなかったけど。
お母さんは本のページを注意深く捲り始めた。目は文章を読んでいて、唇は小刻みに動いている。
「……小太郎、その犬は一匹だけかしら。あと二匹、いるなんていわないわよね」
「おお、よく分ったな。あと、兄と妹がいるのだ。なぜか分裂しているが、個別に動けるというのは、随分と楽だの。わしは気に入ったぞい」
「えええっ、い、犬がしゃべった！？　お母さん、しゃべったよ」
ごつんと頭の骨に響く、ぶ厚い本の一撃を貰った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0768z/

門間家の番犬事情

2011年12月4日23時47分発行